

みな の歴史散歩 No.18

岩下の庚申塔 (町指定文化財)

浦山の庚申塔

社会教育担当
望月 暁

干支と庚申

干支については、みな歴史散歩9月号で己巳塔を取り上げた際に紹介しました。己巳に続き、今回は庚申について見ていきましょう。

干支でいう庚申の日には、当初から「三戸の虫」という考え方がありました。人間の体内には三戸という虫が住み着いており、庚申の日になると天へ罪状を伝えるため、当日は寝ずの番をする必要があるというものです。この考え方は庚申の行事(守庚申)として日本にも伝わり、平安貴族はこれにかこつけて酒宴や管弦、碁、歌合せなど一晩中興じていたことが日記などから分かっています。干支の仕組みが庶民に受け入れられると庚申の行事も年中行事に組み込まれ、講と呼ばれる集団による願かけと、その結願の証としての石塔の建立がなされました。これは己巳の場合とよく似ています。

2つの庚申塔

写真を見てください。右は町指定文化財である三沢岩下の庚申塔、左は金沢浦山の庚申塔です。

三沢の庚申塔は高さ166cm、幅73cm、厚さ65cmで、中央に大きく「庚申塔」の文字が彫られます。側面には、文化元年(1804年)2月、亀田鵬齋が書いた文字を、野沢禽齋が彫刻したと記されています。同じ野沢禽齋が文字を書いた己巳塔の建立は享和2年(1802年)ですから、両者はほぼ同時期に建てられたものです。

一方、宝永7年(1710年)の紀年を持つ浦山の庚申塔には像が刻まれます。これは青面金剛と呼ばれ、もともとはインドの天部にいる神です。憤怒の顔と多数の腕(多臂)を持つのが特徴で、この石塔では合掌する2本のほか、鉾、宝輪、箭(矢)、弓を持つ4本の手が彫られます。両脚の下には三頭の猿が刻まれているのが見えます。見ざる(不見)、聞かざる(不聞)、言わざる(不言)です。このような青面金剛と猿を組み合わせたデザインは全国に数多く分布しています。

石塔の流行は

なぜ生まれるか

同じ庚申塔でありながら、2つの石塔はなぜここまで造形が違うのでしょうか？猿について見ると、古来、動物がさまざまな宗派で使いとみなされ、信仰のシンボルとして表現されてきたことに思い当たります。例として、稲荷神社の狐や三峯神社の山犬、鶴岡八幡の鳩が守りやお土産として売られているのと同じです。肝心の猿は

山王信仰の神使であり、山王社がある場所には猿を刻んだ石塔や、石を彫刻した猿の御神体が残されています。また青面金剛も山王信仰との関わりが指摘されており、浦山の庚申塔のデザインには山王信仰の担い手の意向が強く反映されているといえます。

石塔が建てられる際、願主や施主として宗教者が指導的な役割をはたしていたとはいえず、特定の宗派に限定される必要は必ずしもありません。それにもかかわらず浦山のような庚申塔が全国的に多く見られることは、一時期、山王信仰が多く庶民層から流行に近い支持を受けていた、もしくは当時の支配層から公認されていたことを意味すると考えられます。

逆にいえば、浦山のような規格化されたデザインにとらわれることなく、書の達人に文字を刻んでもらうことができた三沢の庚申塔に、庶民の宗教に対する意識の変化をみてとれるように思います。



浦山の庚申塔

三沢岩下の庚申塔

家庭用簡易焼却炉を無料で回収します

法律により、ご家庭にある簡易的な焼却施設でのごみの焼却は禁止されています。回収をご希望のかたは申し込みのうえ、回収日までに焼却灰を除去し、軽トラックが進入できる場所まで搬出してください。

期 日 11月下旬を予定(申込者には後日回収日を連絡します)

対 象 ①家庭用ブロック積簡易焼却炉(ブロック単位に解体)
②家庭用スチール製小型焼却炉(ドラム缶を除く)

申込み 11月15日(金)までに 町民生活課 環境衛生担当 ☎62-1232

